

信用金庫合併の実際と今後の課題 ——彦根信用金庫と近江八幡信用金庫の合併を中心として——

滋賀大学大学院 元持敏雄

地域金融機関に起る合併再編は、地域に生存するためには避けて通れないことなのだろうか。特に、協同組織金融機関の信用金庫は中小企業専門金融機関として、地域と共に生存してきた歴史がある。合併によって地域が拡がり規模が大きくなることは、住民や取引先、そこに働く者のために有益なことなのだろうか。体験した合併の実際を再調査し、これからの地域金融機関である信用金庫合併のあり方を考察する。

2003年7月、滋賀県内の二つの信用金庫（彦根信用金庫と近江八幡信用金庫）が、合併に合意し、翌年2004年7月に合併が成立した。存続信用金庫は彦根信用金庫・本店所在地は近江八幡信用金庫であった。現在では、預金量3000億円を超えた地方の中規模信用金庫として、既に2期の決算期が経過した。財務的には順調なスタートをきった。

この合併は、全国各地で行われている信用金庫合併と何ら変わらない平均的な合併であったが、監督官庁からは歓迎された。これは直前に施行された「金融機関等の組織再編促進法」に適合し、近畿地方の各府県（京都府・滋賀県・奈良県・和歌山県）が合併によって、各県3信用金庫となることから歓迎されたのであった。

合併した彦根信用金庫は、琵琶湖の北東部に位置し、江戸時代35万石の大藩の城下町として発祥・発展した彦根市を基盤とする信用金庫であり、近江八幡信用金庫は、琵琶湖南東部に位置し、豊臣時代に城下町として発祥、多くの近江商人を輩出した近江八幡市を基盤とする信用金庫であった。

今回の合併は、時間が経過するとともに、両信用金庫の文化や所在した両地域の風土に基因する、双方の考え方の違いが表面化してきた。すなわち、江戸時代の大きな城下町で生成した信用金庫と、近江商人の町として生成してきた信用金庫の違いである。

滋賀県には、明治時代から地域金融機関合併の歴史が多く残されている。各地で展開された合併も、こうした文化・風土の違いが、100年以上経過した今も息づいていた。

近江八幡信用金庫の内部には、疑問の声があがった。戸惑う職員、高年齢職員の退職が続出した。「なぜ合併を選択したのか」「独立独歩の道は残されていなかったのか」等々、合併の是非を問う声が高まった。

また、街中からも、「従来の信用金庫の顔が見えなくなった。」「共存共栄の近江商人精神で創設した我々の信用金庫はどこへ行ってしまったのか。」などの声が、聞こえてきた。

実際の合併経緯を今一度冷静に精査する必要がある。自らの体験をもとに当該合併を再査し、地域金融機関であり協同組織金融機関である信用金庫が、文化や風土が異なる地域まで拡大した合併、あるいは合併によって規模が大きくなった地方の信用金庫は、どうあるべきかにも言及したい。